

氏名(本籍)	とやま けん じ (茨城県) 外山健二		
学位の種類	博士(文学)		
学位記番号	博甲第3875号		
学位授与年月日	平成18年3月24日		
学位授与の要件	学位規則第4条第1項該当		
審査研究科	人文社会科学研究科		
学位論文題目	ポール・ボウルズの英語圏文学 -移動とマグレブ表象をめぐって-		
主査	筑波大学教授	博士(文学)	荒木正純
副査	筑波大学教授	博士(文学)	宮本陽一郎
副査	筑波大学講師	博士(文学)	斎藤一
副査	筑波大学教授	博士(文学)	大熊榮
副査	明治大学文学研究科教授		越川芳明

## 論文の内容の要旨

本論文は、ニューヨークに生まれ、モロッコに永住して作家活動をおこなったポール・ボウルズ (Paul Bowles, 1910-1999) の経歴と作品世界の分析をとおして、彼の移動性の本質を解明し、もって彼の作品世界をとらえようとしたものである。論文の構成は以下のとおり。

序章 なぜ、ボウルズか？

### 第Ⅰ部

- 第一章 抑圧・空想・移動－フレッチャリズム、スプリング・フィールド、グリニッジ・ヴィレッジ
- 第二章 選択されたフランス
- 第三章 フランスからモロッコ－シュール/リアリズムと民族誌学
- 第四章 セイロンへの眼差し－「筈とプライベートな用向け」における階級と余暇
- 第五章 なぜ、スレイドは医者か－『世界の真上で』における「新しいもの」

### 第Ⅱ部

- 第六章 サハラ沙漠の移動－『シェルタリング・スカイ』の自伝性とポート夫婦をめぐって
- 第七章 マジオルカ島と地図－<天上学>と<地上学>の展開
- 第八章 「読み書き能力」をめぐる魅力探求
- 第九章 タンジールと民衆－「山上でのティー」と『雨は降るがままにせよ』
- 第十章 アマールの人形と近代性－『蜘蛛の家』とイスラーム表象

結章 ボウルズの友、アルフレッド・チェスター－アメリカ・モロッコ・イスラエル

序章は、日本内外の先行研究を概括し問題提起をおこなっている。ボウルズ研究の第一人者カポニは、「実存主義」「探偵小説」「シュールリアリズム」をキーコンセプトとして論を展開しているが、著者は、「実存主義」はボウルズの「自己」に係わり、「探偵小説」は諸作品の登場人物の探偵性をあらわし、「シュールリアリズム」はボウルズの作家としての経緯にかかわると分析し、最後の「シュールリアリズム」がボウルズの移動

にとりわけ関与しているとみる。さらに、先行論全体の分析から、ボウルズがマグレブをいかに表象したかという議論がないことに着眼し、ボウルズの「シュールレアリスム」とのかかわりと、アメリカからモロッコへの移動、さらに彼のマグレブ表象とを結びつけて議論するとしている。

第一部第一章は、ボウルズの好んだ地、アメリカのスプリング・フィールドに視点をすえ、ボウルズがいかにアメリカで抑圧を受けたかを、同時代との関係から読みとっている。具体的には、左翼思想が存在するグリニッジ・ヴィレッジでの生活やフレッチャリズムという規則的咀嚼運動との関係で、彼がアメリカを去った理由を追及している。第二章では、ボウルズが、アメリカからモロッコへ移動するまえに、彼の移動先としてフランスを選択した理由を解明している。ついで、第三章では、ボウルズがフランスからモロッコへ移動した経緯を議論し、その背景に、彼が当時採用していたシュールレアリスムと民族誌学の立場からモロッコをみていたことを明かしている。第四章では、ボウルズがアジアへ眼差しを向け、セイロンを舞台とする短編「笠とプライベートな用向け」を書き、そのなかで階級問題を扱っていると示唆している。第五章では、ボウルズが、フランス、モロッコ、さらにセイロンのほか、中南米に移動したことを問題化し、そこを舞台とした長編『世界の真上で』を取りあげ、そこで問題化されたものが何かを論じている。

第二部第六章では、長編『シェルタリング・スカイ』を分析対象として、その作品に見えるマグレブ表象、とりわけサハラにおける塩金交易などについて議論している。第七章では、その塩金交易の議論をもとに、マジョルカ島でユダヤ人が製作したカタロニア地図に描かれるマリ王国との関係で「マジョルカ島と地図」について検討をくわえている。第八章では、ボウルズが、モロッコにおける「読み書き能力」への眼差しをもっていたことを指摘し、第九章では、短編「山上でのティー」と長編小説『雨は降るがままにせよ』を対比しつつ、モロッコのイスラーム圏「市民社会」表象を読みとり、ボウルズがおこなった1930年代と40年代のタンジール表象について論じている。第十章では、『蜘蛛の家』にみられるモロッコ・フェズのイスラーム表象について論じ、また、主人公のムスリムであるアマールが、フェズの博物館で見た人形ともらったぬいぐるみの意味を解説し、そこにアマールの近代性が見てとれると指摘している。

終章では、アメリカ、モロッコ、イスラエルの観点から、ボウルズのユダヤ性について考察している。その際、問題化されたことは、モロッコのユダヤ人問題、モロッコとイスラエルとの関係、パリに本拠を置く世界イスラエル同盟の活動であるアシュケナジームの宗教伝統やシオニズム思想、さらに、ボウルズの友人でユダヤ人のアルフレッド・チェスターとそのカバラーとの関連であり、そうした観点からイスラーム圏モロッコにボウルズが定住した理由を説明し、本論文の総括としている。

## 審 査 の 結 果 の 要 旨

アメリカ合衆国に生まれ育ち、作家活動を開始したポール・ボウルズをめぐる研究論文は、それほどおおく書かれたとはいいがたい。日本においても、解説的な論はあっても、本格的な研究書はなかった。したがって、本論文は、わが国初の本格的ボウルズ論となる。また、本論文の一部をなしたもとの論文は人類学者の間でも注目され、さらなる発展が期待されてもおり、とりわけ、ユダヤ人ボウルズがイスラーム圏の生活を描写したことに着目したことは、本論文の特色となっている。本論文が解明・示唆した主たる成果は、以下の4点にまとめることができる。

- ① ボウルズとシュールリアリストとのつながりや、英仏の帝国主義との関連などからボウルズの移動を考察した点は、本論文の主たる成果であり、とくにシュールレアリスムとボウルズの詩「尖塔歌」を論じたことは特筆に値する。
- ② フレッチャリズムやスプリング・フィールド、グリニッジ・ヴィレッジなど、第二次大戦前の時代背景の考察は十分になされたとはいえないものの、きわめて新鮮な観点として提示されている。

- ③ ポール・ボウルズの移動については、従来、父との確執や米国の反共主義ムードへの嫌悪などから考察されてきたが、本論文は、米国の反ユダヤ主義という補助線をいれて考察している点が斬新である。
- ④ マグレブ表象について議論したところで、マジョルカ島のユダヤ人という観点の導入やカタロニア地図の考察がなされているが、これはボウルズによる翻訳（アラビア語の口承文学）について論じるうえで刺激的な論点になっている。

こうした斬新で刺激的な成果は学界に寄与すると確信するが、本論文に欠点もしくは課題がないわけではない。それは、とりわけつぎの3点である。

- ① フレッチャリズムをはじめとする時代背景の追究は十分な深さにたっしているとはいいがたく、さらなる追究が望まれる。
- ② 従来、英米の研究者で指摘し論じた者はいないので無理な注文かもしれないが、ボウルズのマグレブ表象の中に、どのような反ユダヤ主義への態度が潜んでいるのかが、本論文では論じられていないので論じてほしかった。
- ③ 第七章で、イドリーシーの地図のイドリーシーが、セウタ生まれとあるが、セウタはモロッコにあってスペインの飛び地であった。したがって、イドリーシーはアラブ人ではなく、ユダヤ人なのだろうか？もしユダヤ人なら、それはどのような読みが可能か？

こうした課題をのこしているとはいえ、本論文は、ボウルズ研究のみならず、モロッコをふくめたイスラーム圏研究にたいしても貢献するものであることを付記しておく。

よって、著者は博士（文学）の学位を受けるに十分な資格を有するものと認める。